

1. 見よ。その日が来る。
かまどのように燃えながら。
その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。
来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。・・万軍の主は仰せられる。・・
2. しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。
あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。
3. あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。
彼らは、わたしが事を行なう日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。・・万軍の主は仰せられる。・・
4. あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。
それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。
5. 見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。
6. 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。
それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」

説教

クリスマスは、今から約二千年前にユダヤのベツレヘムでお生まれになったイエスさまの誕生を記念してお祝いする時です。イエスさまがベツレヘムにある家畜小屋でお生まれになった時、ベツレヘムの野で野宿していた羊飼いたちに天使があらわれて言いました。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(ルカ 2:11) 天使の言う通り、イエスさまは私たちの救い主としてこの世に来られました。私たちを罪と滅びから救う救い主です。

救い主の到来はずうっと昔から預言者の口を通して預言されてきました。古くはアダムとエヴァの時から、そして、紀元前約二千年前のアブラハムの時代から、モーセ、ダビデ、イザヤ、エレミヤ、そして、旧約最後の預言者マラキの時代に至るまで、救い主イエスキリストの到来は預言され続けてきました。ちなみにマラキは紀元前 4-5 世紀の人です。このように、救い主イエスさまの到来は、何千年もの長い間、人々がずうっと心から待ち望んできたことでした。最初の間アダム以来、人類は自分の罪の故に神のさばきを受けて死ぬようになります。「罪から来る報酬は死」(ロマ 6:23) と聖書が言うように、人間の死とは「死刑」です。全人類が神の前に罪を犯したので、ひとりも例外なく、この天地を造られた神の前に審判を受けて「死刑」となり、死後には永遠のさばきである地獄に行かなければならなくなってしまうました。人は、誰でも、生まれたままの状態では、神のさばきを受けて死んで地獄へ行かなければなりません。これはとても残念なことです。私たちにとっても残念ですが、何より神にとっても残念です。神は人間を愛して人間を特別に造られました。神に似たものとして人間を造られたのです。それなのに、人間は今や全く神の言うことを聞かず、神に背いて生きています。それで、本当は滅ぼされる以外にありませんが、憐れみ深い神は、そのような罪深い人間を見捨てることなく、罪人を救うために救い主をお与えになりました。それがイエスさまです。旧約の人たちがずうっと待ち望んできた救い主イエスさまです。神は、ご自身に背いて生きている人間を滅ぼすことなく、彼らを罪と滅びから救い出すために救い主イエスさまを与えてくださいました。救い主イエスさまの到来は、神の愛を証しするものです。つまり、神が愛であり、愛をもって私たちを造り、そして今や愛をもって私たちを罪と滅びから救おうとしておられることを何より証明するものです。私たちが勝手に滅びればよいと思っているなら、神は救い主を送ることはありません。でも、私たちが滅びることを願わず、むしろ救われることを願っているのです。神は救い主を送られました。これは神の愛です。

預言者マラキは、世に到来されるイエスさまのことを「かまどの火」と表現しました。「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。」この「かまどの火」であるイエスさまは、「すべて高ぶる者、すべて悪を行う者」を「わら」のように「焼き尽くし」「根も葉も残さない」と言います(マラキ 4:1)。マラキのみならず、旧約の預言者たちは神のさばきを「火」に喩えて表現しました。これは単なる喩えではなく、現実、神に背くイスラエルの町も人も戦火で焼かれて根絶やしにされてしまいました(イザヤ 4:4,7,20,21:17)。「高ぶる者(dzE)」とは、神を見下して神に逆らう者のことで(詩篇 119:21) 我が物顔にこの世を支配して、神の民が神の愛を愛を知ることがないよう惑わし、迫害します(86:14,119:51,69,78,85)。そして、神に背く「悪を行います。神に敵対する悪魔(サタン)あるいは悪魔に取り憑かれた人間と言えるかも知れません。マラキの時代には、神と人を愛することなく、むしろ馬鹿にして侮り(1-2章) 神にまじめに仕えても空しく意味がないと失望していました(3章)。要するに、悪魔に惑わされて、神を完全に見失っていたのです。それで、救い主が彼らの所に来ました。神を知らない彼らの所に、神ご自身がやって来たのです。救い主は「すべて高ぶる者、すべて悪を行う者」を「わら」のように「焼き尽くし」「根も葉も残」しません。こうして、人々の目を眩まして、神の愛を見えなくさせている、「高ぶる者」だの「悪を行う者」といったこの世の不純物を悉く焼き尽くし、人々が神の愛をはっきりと知るようになさいます。神は私たちを愛しておられるのに、この世には神の愛を見えなくさせている邪魔なものがたくさんあります。それで、神は、直接来て、この世をきれいに掃除なさるのです。この世の悪を一掃するイエスさまは、続く2節では「義の太陽」として世に輝くと言われます。「わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。」悪魔がこの世の巨大な暗黒を支配する闇の帝王であるのに対して、イエスさまは「義の太陽」です。燃えさかる炎となって世界の悪を焼き尽くすイエスさまは、同時に「義の太陽」となって世界を照らします。世界は太陽によって明るく照らされますが、ちょうどそのように、イエスさまは世界のすべての者を照らします。どんなに暗い闇も照らします。使徒ヨハネは、イエスさまが「すべての人を照らすまことの光」と呼びました。この方にはいのちがあり、このいのちは人の光で、どんなに闇の力が強くても闇はこれに打ち勝つことはできず、生けるまことの光であるイエスさまが「恵みとまことに満ちた」神の栄光を世界に力強くあらわしたと証言しました。福音書を見ると、イエスさまの行く所どこでも神の栄光があらわれました。どんなに悲惨な状況にある者もイエスさまを通して神の栄光を見ました。重い皮膚病を患う人がイエスさまの前に来て、「お心ひとつで、きよくしていただけます」と平伏した時、イエスさまは、伝染することを忌み嫌って誰も触ることのない彼を両手で触って、「わたしの心だ、きよくなれ」と癒されました。六千もの悪霊に取り憑かれている人の所に行き、イエスさまは彼を助けてあげました。38年間も病で寝たきりの病人の所に行き、「よくなりたいか」と声をかけて、誰も助けてくれない彼をいやされました。娘が死んで嘆き悲しむヤイロの家に行き、12才の娘を生き返らせました。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きる」と宣言し、死んでももう四日も経って墓に葬られているラザロに「ラザロよ、出でよ」と呼びかけて、彼をよみがえらせました。そうかと思えば、姦淫の現場で捕まって石打ちにされそうな女性の罪を赦し、何人もの男と同棲を繰り返すサマリアの女の友となり、七つの悪霊に取り憑かれて罪深いマグダラのマリアを救われました。中風で運ばれてきた男に向かって、イエスさまは言われました。「子よ、あなたの罪は赦されました。」「人の子には、罪を赦す権威がある。」そして、最後は、私たちの身代わりになって神のさばきを受けて十字架で死んで、私たちの罪を清算してくださいました。こうして、イエスさまは、行く先々で、神の愛を明らかになさいました。どんな者でも神さまに愛されていることを身を以て明らかになさいました。それで、寒い家畜小屋も汚れた墓場もこの世で最も悲しく寂しい葬式場も、神の栄光を見る場になりました。どうしようもない罪人も、イエスさまを通して、自分みたいな者を愛してくださる神の愛を知りました。しかも直接知りました。イエスさまこそ「すべての人を照らすまことの光」です。神の愛を知らせる「まことの光」です。これ以上ないほど、最も直接かつ強烈に神の愛を知らせる「まことの光」です。この「義の太陽」に照らされて、人は神の愛を知ります。自分のすべての罪をことごとく照らされて、自分が神さまの前にどんなに罪深いかを思い知ります。そして、同時に、自分がそれでも神に見捨てられていない、むしろ神に愛されていることを知ります。「その翼には、癒しがある」とマラキは言います。「翼」とは太陽の光のことです。古代の人々は太陽の光を「翼」として表現しました。旧約聖書では、神が「翼」をもってご自分の民を救い、守り、敵からかくまい、養うと言われます。鷲が雛を羽に乗せて行くように、神さまはイスラエルを苦しいエジプトの奴隷生活から救い出されました(出エジプト 19:4,申命記 32:11)。翼は空高く天にまで上ることを得させる最強の武器です。この翼によって、神さまはご自分の民をかくまって敵から守り、天高く安全な場所で平安に過ごさせてくださいます(詩篇 36:8,91:4)。ルツはボアズに

「あなたの翼を広げてこのはしためをおおってください」と言いましたが(ルツ 3:9) これは、私と結婚し、これからの人生、私を守り、助け、養い、私の人生の全責任を負ってくださいとの求婚の意味です。マラキは、「義の太陽」の「翼」が、人々に「癒し」をもたらすと言います。つまり、「義の太陽」イエスさまの「翼」が、人々に「癒し」をもたらすと言うのです。「癒し」と訳されるヘブル語 aPer.m;は、「癒し、健やかさ、利益」を意味します。自分が神さまに愛されていることを知ることは、人をいやし、健全にし、益となるのです。「義の太陽」なるイエスさまの光は「翼」です。人を地獄の滅びから天国へと救い出す「翼」です。いと高き所である天国に私たちを入れて、私たちを永遠に守り養う、恵みの「翼」です。「義の太陽」に照らされる時、どんなに罪深い者も神の聖なる義の光を反映して聖く光り輝きます。どんなに汚れて罪深くても、義の衣をまとして聖く光り輝きます。